

分岐学的手法に基づいた日本語・琉球語諸方言の系統分類の試み

五十嵐陽介 (一橋大学)

y.igarashi[at]r.hit-u.ac.jp ※[at] を@に変更してください

要旨

本稿の目的は、共通の改新に基づく分岐学的手法を用いて、日琉語族の系統樹を提案することにある。系統関係のある言語間の系統的近縁性に基づいて、より下位の言語群を確立する過程は下位分類と呼ばれるが、下位分類のための基準となり得るものは、共通改新を措いてほかにない。改新とは、より古い時代には存在せず、特定の時代に新たに生じた言語的特徴のことである。本稿では言語特徴の地理的分布のひとつの様態である「マトリョーシカ分布」に注目する。言語特徴の地理的分布が別の特徴の分布に完全に含まれることで、言語地図上に複数の等語線が交差することなく引かれることがあるが、このようなタイプの言語特徴の分布が「マトリョーシカ分布」である。マトリョーシカ分布を示す言語特徴は含意階層をなすので、本発表ではこの分布を、入れ子状に生じた一連の改新を示すものと解釈し、これに基づいて系統樹を構築する。提案される系統樹では、1) 少なくとも2つの語派、「拡大東日本語派」と「南日本語派」とが定義され、2) 「本土日本語」ないし「日本語派」と呼ばれてきた語群は系統的分類群としては成立せず、3) 琉球諸語は南部九州語と姉妹関係にあり、4) 八丈語は糸魚川浜名湖線以東に分布する諸言語とともに単系統群「中核東日本語群」を形成する。

1. はじめに

1.1 目的

- 共通の改新に基づく分岐学的手法を用いて、日琉語族に属する諸言語（琉球列島の諸言語と日本本土の諸言語）の系統樹を構築する。
- 言語の分岐過程を反映する地理的分布として「マトリョーシカ分布」に着目する。

1.2 日本語族の系統樹に関する通説

- 琉球列島の諸言語と日本本土の諸言語は、日琉祖語 (Proto-Japonic, PJ) を共通祖先とする姉妹言語 (sister languages) である (e.g. Pellard 2015)¹。
- 日本本土の諸言語 (本土方言) の系統樹を構築する本格的な研究はほとんどない。
 - Lee & Hasegawa (2011)はその課題に取り組んだ研究²であるが、問題³が多い。
- そもそも (本土) 日本語派なる系統群は存在するのか? (五十嵐 2016a; 2018b)

¹ 琉球語派・日本語派・八丈語派の3姉妹となる可能性も示唆されている (Pellard 2015)。

² この他に、Lee & Hasegawa (2011)と同一のデータを用いて分析を行った Saitou & Jinam (2017)がある。

³ Lee & Hasegawa (2011)は、日本本土の諸言語 (単系統群) の共通祖語が中世日本語と姉妹関係にあるとし、かつその分岐年代を15世紀頃とする。しかしながら、日琉語族に属する言語は遅くとも3世紀には日本列島で用いられており (『三国志』)、その話者は5世紀には現在の埼玉県まで (埼玉県稲荷山古墳出土「金錯銘鉄剣」)、8世紀には現在の福島県まで拡散していた (『万葉集』東歌)。また8世紀には、日琉語族は畿内の中央語と東日本の東国語の少なくとも2系統に分岐していた。Lee & Hasegawaの系統樹が仮に正しければ、日本本土に分布していた複数の系統群は、ただ1つの系統 (中央語系統) を残して、15世紀以前にすべて消滅したことになる。その時、人間集団の置き換えがなかったのであれば、非中央語から中央語への言語の置き換えが起こったことになる。「本土日本語15世紀分岐説」を支持するということはすなわち15世紀までに全国的かつ徹底的な、中央語話者による人間集団の置き換え、あるいは中央語系統への言語の置き換えが起こったという説を支持することである。

1.3 本稿が提案する日本語族の系統樹 (図2)

- 少なくとも2つの単系統群, 「拡大東日本語派」と「南日本語派」が定義される。
 - 「拡大東日本語派」は糸魚川浜名湖線以東の諸言語からなる単系統群「中核東日本語」を子孫に持つ。
- 琉球諸語 (および八丈語) を除いた (本土) 日本語という単系統群は成立しない。
- 琉球諸語は南部九州語 (~薩隅方言) の姉妹言語である。
- 八丈語は糸魚川・浜名湖線以東の諸言語と単系統群 (「中核東日本語」) をなす。

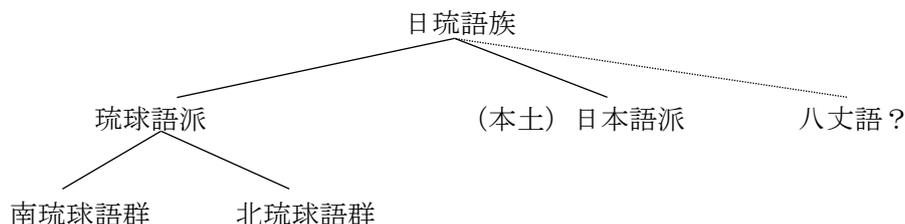


図1 広く受け容れられて日琉語族の系統樹 (Pellard 2015 より一部改訂).

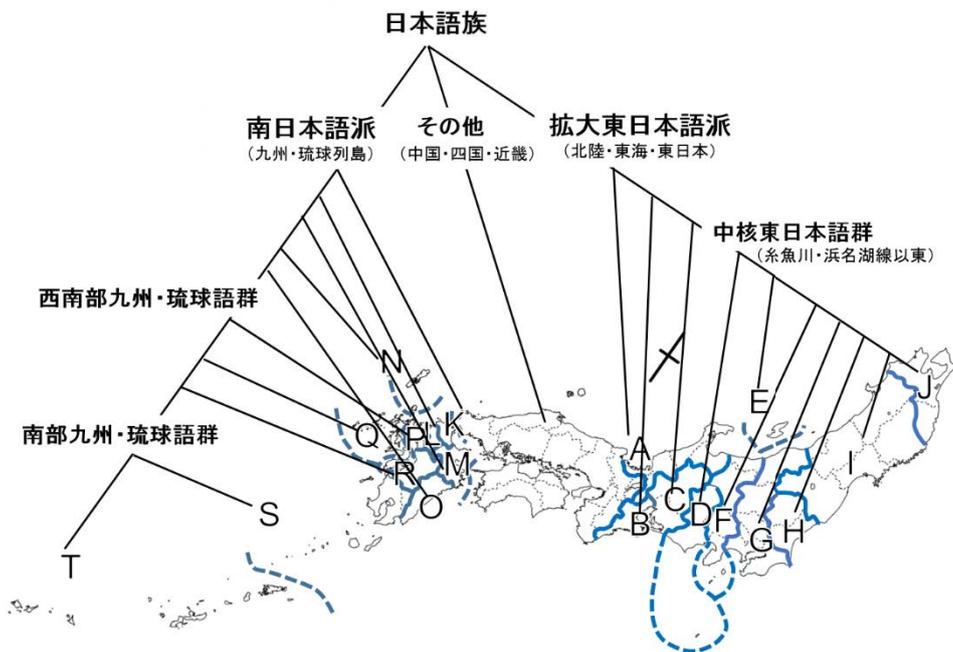


図2: 本稿が提案する日本列島の諸言語の系統樹。図5に示す CLIQUE (1) に基づく。

1.4 同系の言語の下位分類

- 系統関係のある言語同士の系統的近縁性に基づいて、より下位の言語群（「琉球語派」や「日本語派」など）を定義する過程は下位分類（subgrouping）と呼ばれる。
- 下位分類は共通改新（shared innovation）によってのみ主張できる（Leskien 1876; Brugmann 1884: 253; Fox 1995; Atkinson and Gray 2005; Campbell 2006; Campbell and Poser 2008）。
 - 改新：より古い時代には存在せず、特定の時代に新たに生じた言語的特徴
- 改新を共有する諸言語は、（改新の共有が借用あるいは並行変化の結果でない限り、）そのみからなる系統群をなす。
- 古形を共有している事実は、下位分類の根拠となりえない。
- この下位分類の手法は分岐学的手法と呼ばれ、琉球列島の諸言語の系統研究に近年盛んに用いられているが（ローレンス 2003; 2004; 2008; 2011; Pellard 2009）、日本本土の諸言語にはほとんど全く適用されていない。

1.5 マトリョーシカ分布

- **マトリョーシカ分布⁴：**
 - 言語特徴 a の分布が言語特徴 b の分布を完全に含み、言語特徴 b の分布が言語特徴 c の分布を完全に含むようなタイプの分布（＝言語特徴の分布が含意階層を形成するようなタイプの分布）。
 - マトリョーシカ分布をなす特徴に基づいて引かれた等語線を 1 枚の言語地図に重ねると、等語線が入れ子状（nesting）に分布することになる。
- マトリョーシカ分布は、一続きの改新が入れ子状に生じた結果と説明しうる（Sagart 2004）。
 - ある言語共同体の言語に a が生じ、そののち a を持つ言語共同体の一部の集団の言語に b が生じ、そののち b を持つ言語共同体の一部の集団に c が生じたと説明される。
- マトリョーシカ分布は系統分岐を反映する地理的分布の類型とみなせる。
 - 言語特徴のマトリョーシカ分布は、特徴の伝播（借用）の結果であると解釈するわが国で主流の枠組みでは説明できない。
- 日本本土にマトリョーシカ分布が観察される事実は管見の限りこれまで指摘されていないが、図 3-4 に示すように、筆者の分析では、東日本および南日本（九州・琉球）に観察される。

⁴ Laurent Sagart 氏は、“I observed that the six numerals [...] are reflected in Formosan languages according to the implicational hierarchy [...]; that these six etyma occupy geographical areas nested like matryoshka dolls (Sagart 2013: 1)”と述べている。したがって「マトリョーシカ分布」という命名は筆者独自のものというわけではない。

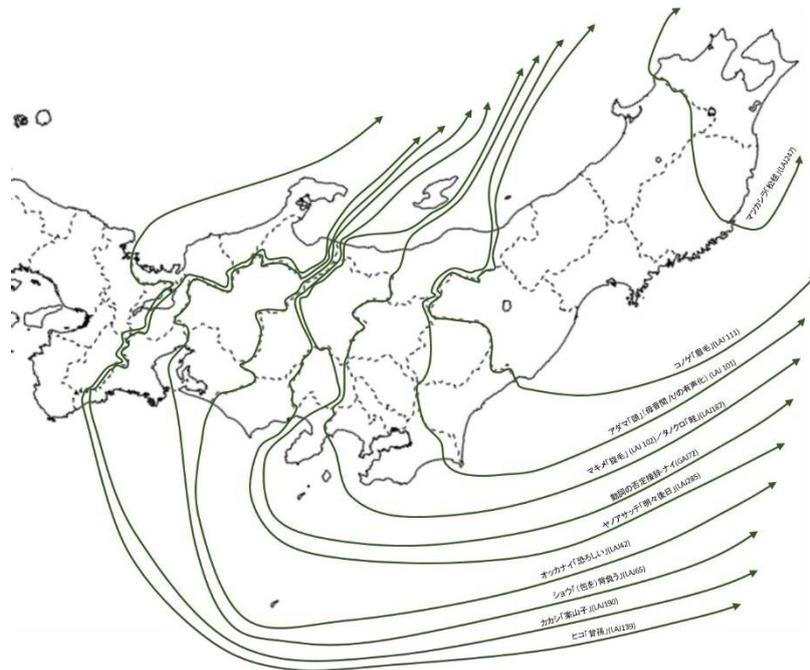


図3: 東日本におけるマトリョーシカ分布. 東日本には, 交差せずかつ含意階層をなす等語線を少なくとも10本引くことができる。

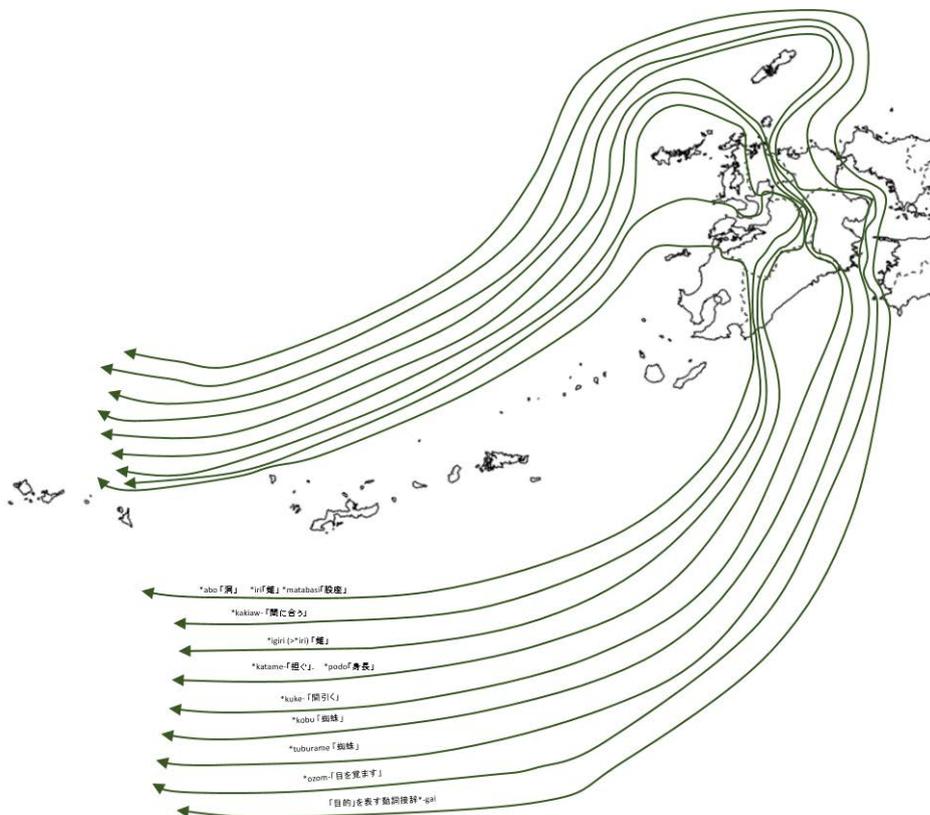


図4: 九州・琉球列島におけるマトリョーシカ分布. 九州・琉球列島には, 交差せずかつ含意階層をなす等語線を少なくとも9本引くことができる。

2. 手法

2.1 データ

- 東日本の諸言語 (全 26 項目 (表 1)) :
 - 『日本言語地図』(GAJ 1966-74)⁵から 24 項目, 『方言文法全国地図』(LAJ 1989-06) から 1 項目, マトリョーシカ分布を示すと思われる項目を採用。筆者が新たに 1 項目追加。
- 南日本 (九州と琉球) の諸言語 (全 70 項目 (表 2))⁶ :
 - 野原 (1979-83) が「九州方言と琉球方言とに共通する語」として挙げる約 800 項目から 58 項目を採用。
 - ◇ 九州以外の本土にも存在する項目を除外 (その際, 方大辞 (1989), 日国 (2000-02), 上代辞 (1967) 等を参照。
 - ◇ 更に北琉球語, 南琉球語の双方に存在が確認できるものに限定 (その際, 仲宗根 (1983), 国立国語研究所 (編) (2001), 菊千代・高橋 (2005), 宮城 (2003), 富浜 (2013), 前新 (著), 波照間・高嶺・入利 (編著) (2011), 下地 (編) (2017) 等の琉球語諸方言辞書を参照)。
 - 筆者が新たに 12 項目追加。
- 全 96 項目を改新とみなし, 各言語ごとに, 当該の改新の存在を “1”, 欠如を “0” としてコード化した二値行列を作成する (表 3)。

⁵ 『日本言語地図』の一部は電子化され LAJDB (熊谷 2007) として公開されている。本稿も LAJDB を補助的に利用した。

⁶ 琉球列島の言語と九州の言語が「近い関係」にあるという指摘は, 古くは伊波普猷 (1911), 服部四郎 (1979) によってなされており, その後も野原三義 (1979-83), 上村幸雄 (1997) などによってなされている。最近でも狩俣繁久 (2002, 2016, 2018), 風間伸次郎 (2012), 五十嵐陽介 (2016a, 2017ab, 2018b) が琉球列島の言語と九州の言語の近さを主張している。しかしながら従来の研究は, ほとんどの場合, 両者の類似性を指摘するにとどまっておらず, 系統的な近縁性を主張する根拠を必ずしも提示していない。言語/方言同士の類似性と系統的な近縁性は互いに独立した尺度である。表面的には類似した 2 言語の系統的距離が, 表面的には大きく異なる 2 言語間の系統的距離より, 大きいことも有り得る。系統的な近縁性は共有改新 (shared innovation) によってのみ主張できるので, 琉球列島の言語と九州の言語の近縁性を主張するためには, 仮定される両者の共通祖語以前には存在せず, 共通祖語において新たに生じた特徴を見つけ出さなければならない。この目的のために最初に行うべき作業は, 九州の言語と琉球列島の言語のみが共有している語を見つけ出すこととなるだろう。そのような語を大量に収集したのが野原三義の研究 (1979-83) である。しかしながら, 野原のリストに掲載された語の約 8 割は, 方大辞 (1989) 等を利用してその地理的分布を検討すると, 琉球列島と九州以外の地域にも分布することが明らかになる (五十嵐 2017a)。例えば, イラ「海月」, オラブ「呼ぶ」, ソーケ「竹製の筥」, ツズ「唾」, ナバ「茸」, フツ「蓬」, ホメク「蒸し暑くなる」, ヨキ「斧」などは, その分布が琉球・九州に限定されているわけではない。このような語の大部分は, 琉球列島の言語と九州の言語の共通祖語より昔に遡る古形であろう。五十嵐 (2017a) は, この点を考慮し, 琉球列島と九州列島のみ分布し, かつ北琉球語と南琉球語の双方に存在が確認できる語のリスト「九州・琉球同源語調査票」を提案した。「九州・琉球同源語調査票」の最新版は五十嵐 (2018b) に掲載されている。

表 1: 拡張東日本祖語およびその子孫における改新. “LAJ_X”および“GAJ_X”の X は, LAJ
(1989-2006) および GAJ (1966-74) における地図番号を表す。

改新	日本本土における例
1 「曾孫」の意味の語形 <i>hiko</i> (LAJ_139)	ヒコ「曾孫」
2 「担ぐ」の意味の <i>katag-</i> の第 2 母音の不規則変化 <i>a > u</i> (i.e. <i>katsug-</i>) (LAJ_66)	カツグ「担ぐ」
3 <i>mam-</i> で始まる「眉毛」の意味の語形 (LAJ_111)	マミ「眉毛」
4 「曾孫」の意味の <i>jafago</i> (LAJ_140)	ヤシヤゴ「玄孫」
5 「氷」の意味の <i>figa-</i> (LAJ_261, LAJ_262)	シガ「氷」
6 「案山子」の意味の <i>kagafi</i> の第 2 子音の不規則変化 <i>g > k</i> (無声化) (i.e. <i>kakafi</i>) (LAJ_190)	カカシ「案山子」
7 「背負う」の意味の <i>fow-</i> (LAJ_65) (< <i>se-ow-</i>)	ショウ「背負う」
8 「粳米」の意味の <i>urutfi</i> (LAJ_168)	ウルチ「粳米」
9 <i>aku(i)-</i> で始まる「踵」の意味の語形 (LAJ_129) (<? <i>*a-kupi-</i> cf. 上代語 <i>a-</i> 「足」, 上代語 <i>kupi-pi₁su</i> 「踵」)	アクト「踵」
10 「崖」の意味の <i>mama</i>	ママ「崖」
11 「鱗」の意味の <i>koke-</i> (LAJ_217)	コケ「鱗」
12 「恐ろしい」の意味の <i>okkana-</i> (LAJ_42)	オッカナイ「恐ろしい」
13 「塩辛い」の意味の <i>foppa-</i> (LAJ_39)	ショッパイ「塩辛い」
14 <i>m{u/o}</i> - から始まる「くすぐったい」の意味の語形 (LAJ_32)	ムツグツタイ「くすぐったい」
15 「明々後日」の意味の語形 <i>janoasatte</i> (LAJ_285)	ヤノアサツテ「しあさって」
16 <i>kana(ki)-</i> から始まる「蜥蜴」を意味する語形 (LAJ_224) (> <i>kamagi-</i> (恐らく蟻螂との類推から) > <i>kagami</i> (音位転倒))	カナギッチョ「蜥蜴」 カマガッチョ「蜥蜴」 カガミッチョ「蜥蜴」
17 否定の動詞接辞 <i>-nae</i> (GAJ_72) (cf. 上代東国語の否定の動詞接辞連体形 <i>nap-e₁</i>)	～ナイ (否定の動詞接辞)
18 「瞳」の意味の <i>manako</i> の第 3 母音の不規則変化 <i>o > u</i> (i.e. <i>manaku</i>) (LAJ_110)	マナク「瞳・目」
19 「旋毛」の意味の <i>makime</i> (LAJ_102)	マキメ「旋毛」
20 「田の畔」の意味の <i>tanokuro</i> (LAJ_187)	タノクロ「畦」
21 「鬢」の意味の <i>fida-</i> (<i>fidare-</i> 「枝垂れ」における最終音節 /re/ の脱落か) (LAJ_205)	シダゲ「鬢」
22 規則的音変化 <i>t > d / V _ V</i> (母音間の /t/ の有声化) (LAJ_101)	アダマ「頭」
23 「唾」の意味の <i>fitaki</i> (更に > <i>kVtaki</i>) (LAJ_118)	シタキ「唾」
24 「眉毛」の意味の <i>ko:noge</i> (LAJ_111)	コノゲ「眉」
25 「松毬」の意味の <i>matsukafira</i> (LAJ_247)	マツカシラ「松毬」
26 「鼻」の意味の (<i>m</i>) <i>oho-</i> (LAJ_212)	オホドリ「鼻」

表 2-a: 南日本祖語およびその子孫における改新. 左肩の A, B, C は琉球祖語におけるアクセント類。動詞および動詞派生の名詞のアクセント類で A 類でないものは, B 類であるか C 類であるかが不明であるため BC と表記する (五十嵐 2016, 2018a 参照)。

	改新	日本本土における例
27	移動の目的を示す動詞接辞* ga(-i) (野原 1979: 13)	ミギヤイク「見に行く」
28	「奪う」の意味の* bakaw ^{BC} (野原 1982: 4)	バカウ「奪う」
29	* ozom ^B の意味変化「恐れる」>「目覚める」(野原 1979: 10)	オゾム「目覚める」
30	「休憩する」の意味の* jokow ^{BC} (野原 1983: 6)	ヨコウ「休憩する」
31	「穴」を意味する* poge ^A (野原 1982: 13) ⁷	ホゲ「穴」
32	* pum- (>* kum ^A) ⁸ の意味変化「踏む」>「履物を履く」(野原 1982: 11)	フム「(履物を) 履く」
33	「ツルレイシ・苦瓜」を意味する* gaori (> 琉球祖語* gaorja ^C) (野原 1981b: 15)	ゴリ「苦瓜」
34	「<魚>ベラ」の意味の* kusabi ^C (野原 1981a: 7)	クサビ「ベラ」
35	「休み」の意味の* jokoi ^{BC} (野原 1983: 6)	ヨコイ「休憩」
36	「溺れる」の意味の* obokure (>* obukure ^A) ⁹ (野原 1981a: 2)	オボクルル「溺れる」 オブクルル「溺れる」
37	「鱗・ふけ」の意味の* iruko 「鱗」の第2母音の変則的变化(順行同化) u>i (i.e. * iriko ,>琉球祖語* irike ^B) (野原 1979: 7)	イリコ「鱗」
38	「踵」の意味の* ado ^B (野原 1979: 4)	アド「踵」
39	「中休み」の意味の* naka-jokoi ^C (野原 1981b: 14)	ナカヨコイ「中休み」
40	「平地・耕地」の意味の* paru ^B (野原 1982: 6)	ハル「耕地・平地」
41	「蝸牛」の意味の* tuburame (?>琉球祖語* tuNname ^C) (野原 1981b: 9)	ツナナメ「蝸牛」
42	「蜘蛛」の意味の* kobu ^C (野原 1981a: 11; GAJ_233)	コブ「蜘蛛」
43	「鍋の煤」の意味の* peguro ^A (野原 1982: 13)	ヘグロ「鍋墨」
44	「田螺」の意味の* ta-mina ^B (野原 1981b: 6)	タミナ「田螺」

⁷ 動詞 *hoge*-「穴があく」, *hogas*-「穴をあける」は九州だけでなく, それに加え中国地方西部, 四国西部を中心に分布しているが, 前者の転成名詞と思われる *hoge*「穴」は日本本土では九州にのみ分布する。

⁸ 琉球祖語には**pum-*ではなく**kum-*が立てられるが(奄美大島大和浜 *kum-*, 与論島東区 *kum-*, 伊江島 *k'um-*, 今帰仁 *k'um-*, 首里 *kum-*, 伊良部島長浜 *fum-*, 池間 *nm-*, 多良間 *mm-*, 石垣島四箇村 *φum-*, 竹富 *φum-*), これを変則的な変化 *p* > *k* (調音位置の逆行異化) の結果とみなす。すなわち本稿では *p* :: *k* の対応を規則的な音変化の結果とはみなさない。

⁹ 琉球祖語形はおそらく**obokure-*ではなく**obukure-*あるいは**ubukure* (すなわち第2音節の母音は**o*ではなく**u*)であろう。宮古語池間方言では琉球祖語**bo*は*bu*として反映される(e.g. *ubui*-「覚える」)のに対して, **bu*は*u*として反映されるが(*kjuusi*「煙」, *pau*「ハブ」), 「溺れる」の意の語は池間方言では*uuffi-*である。長崎県五島列島, 熊本県玉名郡・葦北郡, 鹿児島県下甕島には**obukure*ないし**ubukure-*に遡る反映形が見つかる。

表 2-b: 南日本祖語およびその子孫における改新 (続き) .

	改新	日本本土における例
45	「間引く」の意味の *kuke- (> *puke- , 改新 70 参照) (野原 1981a: 7)	クケル「(野菜を) 間引く」
46	*kazime-B の意味変化「独り占めする」>「大切に保管する」 (野原 1979: 14)	カジメル「片づける」
47	「蛾・蝶」の意味の *paberi(-V)^{C?} (野原 1982: 6) (上代語 pipiru 「蛾」と関係のある語だろうが, どのような変化を経たかは不明。)	ハベリョオ「蛾」
48	「上の方」 *uwara^A (野原 1981a: 3)	オワラ「上の方」
49	「単衣もの」の意味の *tanasi^A (野原 1981b: 5) (借用語か)	タナシ「単衣もの」
50	「担ぐ」を意味する *katage- の第 3 子音の変則的变化 g > m (i.e. *katame-^{BC}) (野原 1979: 14)	カタムル「担ぐ」
51	*podo^A の意味変化「程」>「身長」 (野原 1982: 14)	ホド「身長」
52	*pada の意味変化「空間的な間隔」>「時間的な間隔」	ハダ「時間の程」
53	形容詞を動詞化する構文 *-sa(=i)#su-	ネムシャスツ「眠たがる」
54	移動の手段を表す名詞接語 *=kara (野原 1981a: 4)	フネカラキタ「船で来た」
55	「胞衣・胎盤」の意味の *irja^A(?) . (野原 1979: 6)	イヤ「胞衣」
56	「閏月」の意味の *jori-tuki^A (野原 1983: 6)	ヨリズキ「閏月」
57	*sone^C の意味変化「地上の地形 (山の背)」>「海中の地形 (海中の魚の取れる瀬)」 (方大辞 1989 等)	ソネ「海中の魚の取れる瀬」
58	「滓・沈殿物」の意味の *gori/ *gore^A (野原 1981a: 12)	ゴリ「滓」
59	「薪の灰」の意味の *kara-pai^A (野原 1981a: 4)	カラハイ「薪を燃やした灰」
60	*kamuge- 「頭に載せる」の第 3 子音の変則的变化 g>m (i.e. *kamme-> PR *kame-^{BC}) (野原 1981a: 5)	カンメル「頭に載せる」
61	「錐」の意味の *igiri (*iri^B , 改新 71 参照) (方大辞 1989)	イギリ「錐」
62	「蚊・蚋」の意味の *kazjam^{V^C} (原田 1993; 植村 2001)	ガジャブ「蚋」
63	漢語 *dou^C の意味変化「胴」>「自分自身」 ¹⁰ (野原 1981b: 7)	Dōuo vru. 「自分自身を売る」
64	「分け前」の意味の *tamasi^A (野原 1981b: 5)	タナシ「分け前」

¹⁰ 漢語 ***dou** の「胴」から「自分自身」への意味変化は, 琉球祖語を定義づける改新とみなされてきたが (Pellard 2015:15), 少なくとも 17 世紀に九州の言語において, 問題の語が「胴」の他に「自分自身」という意味を持ったことが日葡辞書で確認できる (日葡辞 1980: 185)。したがって, 問題の改新は琉球祖語が九州の諸言語から分岐する前に生じた改新とみなさなければならない。

表 2-c: 南日本祖語およびその子孫における改新 (続き) .

	改新	日本本土における例
65	「厄の晴れること・後厄」の意味の*pare-jaku ^B (野原 1982: 5) (琉球諸語における分節音の対応が不規則であるため, 借用語である可能性が高い。)	ハレヤク「厄の晴れること」
66	「鳥もち」の意味の*jani-moti ^C (野原 1983: 5)	ヤンモチ「鳥もち」
67	「間に合う」の意味の*kakiaw- ^B (野原 1979: 13)	カキオ「間に合う」
68	「唇」を意味する*tuba「唇」の語頭子音の変則的な変化 t > s (i.e. *suba ^B) ¹¹ (野原 1981b: 1)	スバ「唇」
69	地震の時の呪言である「経塚」の意味の*kjau-tuka ^B (野原 1981a: 6)	キョーツカ「地震時の呪言」
70	「間引く」の意味の*kuke-の語頭子音の変則的な変化 (調音位置の逆行異化) k > p (i.e. *puke- ^{BC}) ¹² (野原 1981a: 7)	フケル「間引く」
71	「錐」を意味する*igiri「錐」における第2音節の子音の変則的な脱落 (i.e. *iri ^B) ¹³ (野原 1979: 7) (*igiri, 改新 61 参照)	イー「錐」
72	「洞穴・崖・溝」の意味の*abo ^A (方大辞 1989)	アボ「断崖」アボ「洞窟」
73	*obi ^C の意味変化「帯」>「箍」(野原 1979: 11)	オビ「箍」

¹¹ 日本本土には北部九州を中心に分布する*tuba「唇」と、南部九州に分布する*suba「唇」の2つの形が認められる。s > tの変化 (fortition) より t > s (lenition) の方が自然であることから、本稿では*tubaが古形であり*subaが改新であるとみなす。一方で、上代語 sipabuk-「咳をする」における sipa-を「唇」の意味の語根とみなし、この語を*suba (語頭に/s/)と同根と見る見解もある (上代辞 1967: 364)。この見解が正しければ、問題の語に t > s の変化を再建することも、この変化を南部九州の言語と琉球列島の諸言語の共通改新とみなすことも誤りとなる。しかしながら、sipa-と*subaを同根と見る見解には、不規則な母音変化 i > u と不規則な有声化 p > b を仮定しなければならないという問題が残る。sipa-と*subaは同根ではない可能性は依然としてある (例えば前者は「唇」ではなく「咽」の可能性はないだろうか)。単独の*suba「唇」(語頭/s/)は、管見の及ぶ限り、南部九州と琉球列島にのみ観察されるので、南部九州・琉球祖語の存在を支持する証拠とみなすことができる。一方で、「吸う・嘗める・しゃぶる」の意味で subapur-が香川県高松市に、subakur-が徳島県、香川県に観察され (日方辞 1989: 1272)、これらは前部要素に*suba「唇」を持つ複合動詞である可能性がある。「吸う・嘗める・しゃぶる」の意味ではほかに suwabur-がより広範に分布している。suba-と suwa-および上代語の sipa-と、*tuba「唇」および*suba「唇」との関係 (そして*sup-「吸う」との関係) は更なる研究が必要である。

¹² 熊本県芦北郡・八代郡、宮崎県東諸県郡 (日方辞 1989: 2085)、宮崎県小林市 (橋口 2004: 513)、鹿児島県阿久根市・出水市・曾於郡 (橋口 2004: 511, 513) においては、*kuke-ではなく*puke-に対応する反映形が観察される。琉球祖語は今帰仁の p^huk[?]iru[?] 「間引く」が示すように語頭子音は*kではなく*pである。本稿では k :: p の対応を規則的な音変化の結果とはみなさず、変則的な変化 k > p (調音位置の逆行異化) とみなす。

¹³ *igiri「錐」は恐らく、佐賀県、長崎県、熊本県に観察される動詞 igir-「錐で穴を開ける」から派生した名詞であると思われる。南部九州および琉球列島の*iri「錐」はこの*igiriの第2音節の子音/g/の変則的な脱落という改新の結果と思われる。*igiri, *iriと中央語 kiri「錐」との関係は詳らかでないが、恐らく同源であろう。いずれにせよ*iriは改新形であり、*iriは南部九州と琉球列島にしか観察されない。

表 2-d: 南日本祖語およびその子孫における改新 (続き) .

	改新	日本本土における例
74	漢語*tentau「太陽」の第2音節の変則的な有声化(e.g. *tendau > *teda ^C) ¹⁴ (LAJ_251)	テンドーサン「太陽」
75	「疣・虫刺されの跡」の意味の*kutibe ^C (cf. 上代語 pusube ₂) ¹⁵ (野原 1981a: 8)	クチメ「蚤や虫などに刺された跡」
76	「<魚>メアジ」の意味の*gattunV ^{A/B/C} (方大辞 1989)	ガッツン「真鱈」
77	「ナマコ」の意味の*sikiri ^C (植村 2001: 129; 橋口 2004: 752-753)	シキー「ナマコ」
78	「<魚>コウイカ」の意味の*kobusime ^C (野原 1981a: 11)	コブシメ「コウイカ」
79	「<魚>イダコ」の意味の*sugari ^B (日琉祖語*suNkarV(?) (cf. 上代語 sugaru「蜂」)の意味変化「蜂」>「蛸」か。琉球列島以外では種子島のみ)	スガル「飯蛸」
80	「<魚>ボラの稚魚」の意味の*tikura ^{A/B/C} (野原 1981b: 7)	チクラ「鱸の子」
81	「<魚>トウゴロウイワシ」の意味の*padara ^C (方大辞 1989)	ハダラ「トウゴロウイワシ」
82	「股座」の意味の*mata-basi ^B (野原 1982: 15)	マタバイ「股座」
83	「屋内に降り込む雨」の意味の*uti-ame ^B (野原 1979: 8)	ウチアメ「屋内に降り込む雨」
84	「内出血・打ち身」の意味の*uti-ti ^B (野原 1979: 8)	ウチチ「打ち身」
85	「木挽き・木を挽く職業」の意味の*ke-waki (野原 1981a: 7)	キワキ「木挽き」
86	「気候・肌触り」の意味の*pada-moti ^B (野原 1982: 5)	ハダモチ「気候」
87	「開墾」の意味の*siake ^A (野原 1981a: 15)	シアケ「開墾」
88	「竹製の籠・箆・蓬莱竹」の意味の*bake ^C (琉球語からの借用語か)	バケ「蓬莱竹」
89	「タカセガイ・ギンダカハマガイ」の意味の*taka-mina	タカミナ「高瀬貝」
90	「借金・負債」の意味の*okka ^C (野原 1979: 10)	オッカ「借金」
91	「用心が足りないこと・愚か者」の意味の*butamasi (野原 1981b: 6)	ブタマシ「思慮の足りない事」
92	「酒器の一種 (お銚子・徳利)」の意味の*karakara ^C (野原 1981a: 4) (琉球諸語における分節音の対応が不規則であるため, 借用語である可能性大)	カラカラ「徳利」

¹⁴ 漢語 (特に2音節漢語の第2音節) における二重母音*au は琉球祖語の*a と対応することが多い。例えば*sata「砂糖」(<*satau^C 砂糖), *kacja^A「蚊帳」(<*kacjau 蚊帳) など。また漢語ではないが*suma^{A?}「相撲」のような例もある。このことは*au :: *a の対応が規則的であることを示唆する。本稿では*tentau を古形として*tendau を改新形としたが, 反対に*tendau が古形の可能性も等しくあり得る。

¹⁵ 東日本を中心に「黒子」の意味で kusube, husube, hosobi 等が分布しており, これらは琉球祖語*kutibe^C「疣」および上代語 pusube₂「瘤・疣・黒子」と同源であろう。第1音節の子音が/k/であり第2音節の子音が/t/である形は, 九州と琉球列島にのみ観察される。

表 2-e: 南日本祖語およびその子孫における改新 (続き) .

	改新	日本本土における例
93	*wogi ^B の意味変化「荻」>「甘蔗」(野原 1979: 9) (琉球列島以外では種子島のみ。指示対象の新しさから借用語の可能性大)	オーギ「甘藷」
94	「孵化する」の意味の*sudas- ^{BC} (野原 1981a: 20) (琉球列島以外ではトカラ列島のみ)	スダス「孵化する」
95	「ヤドカリ」の意味の*amamu ^C (野原 1979: 4) (琉球列島以外ではトカラ列島のみ)	アマム「ヤドカリ」
96	「北極星」の意味の*ne-no-pau-bosi > *ne-no-pa-bosi ^A (野原 1982: 2) (琉球列島以外ではトカラ列島のみ)	ネノホーボシ「北極星」

表 3-a 改新の二値行列.

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27-96
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
福井県	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
石川県	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
富山県	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
滋賀県東部	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
三重県	1	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
岐阜県飛騨	1	1	0	1	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
岐阜県美濃	1	1	1	0	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
愛知県	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
長野県南部	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
静岡県西部	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
八丈島	1	1	1	1	0	1	1	1	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
佐渡島	1	1	1	1	1	1	1	0	0	1	0	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
長野県北部	1	1	1	1	0	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
山梨県	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
静岡県東部	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
伊豆諸島	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
新潟県上越	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
東京都	1	1	1	1	0	1	1	1	0	0	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0
神奈川県	1	1	1	1	0	1	1	1	0	1	1	1	1	0	1	1	1	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0
千葉県	1	1	1	1	0	1	1	1	0	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0
埼玉県	1	1	1	1	0	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0
群馬県	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0
新潟県中越	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0
栃木県	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0
茨城県	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0
新潟県下越	1	1	0	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0
福島県	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0
宮城県	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0
山形県	1	1	0	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0
岩手県南部	1	1	0	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	0	0	0
秋田県	1	1	0	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	0	1	0	0	0
岩手県北部	1	1	0	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	0	1	1	1	0
青森県	1	1	0	1	1	1	1	0	1	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	0	1	1	1	0

表 3-b: 改新の二値行列.

	1-26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57
福岡県豊前	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
福岡県筑前	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
大分県	0	1	0	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
老岐・対馬	0	1	1	1	0	1	1	0	1	0	1	0	0	0	0	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1
宮崎県北部	0	1	0	1	1	0	1	1	0	1	0	1	1	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
佐賀県	0	1	0	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1	1	0	1	0	0	0	0	1	1	1	1	1	0	0	0
長崎県	0	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	0	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
宮崎県南部	0	1	1	1	1	0	1	1	0	1	0	1	1	0	0	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
熊本県	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	1	1	1	1	1	1	0	0
鹿児島県	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	1	1	1	1	1	0	0	0	1	1	1	1	0	1	1	1	1
琉球祖語	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

表 3-c: 改新の二値行列.

	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89
福岡県豊前	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
福岡県筑前	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
大分県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
老岐・対馬	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
宮崎県北部	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
佐賀県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
長崎県	1	1	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
宮崎県南部	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
熊本県	0	0	0	1	0	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
鹿児島県	1	0	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
琉球祖語	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

表 3-d: 改新の二値行列.

	90	91	92	93	94	95	96
福岡県豊前	0	0	0	0	0	0	0
福岡県筑前	0	0	0	0	0	0	0
大分県	0	0	0	0	0	0	0
徳島・対馬	0	0	0	0	0	0	0
宮崎県北部	0	0	0	0	0	0	0
佐賀県	0	0	0	0	0	0	0
長崎県	0	0	0	0	0	0	0
宮崎県南部	0	0	0	0	0	0	0
熊本県	0	0	0	0	0	0	0
鹿児島県	1	1	1	1	1	1	1
琉球祖語	1	1	1	1	1	1	1

2.2 系統樹の推定手法

- Thomas Pellard 氏の博士論文 (Pellard 2009) の手法に準拠する。
- 系統樹推定のためのソフトウェア Phylyp (Felsenstein 1989) の 2 つのプログラム CLIQUE を利用。(祖先状態をすべて 0 とするオプションを使用)。
 - CLIQUE : Maximum compatibility method に基づく
- 表 3 の二値行列を入力として与える。

3. 結果

3.1 結果

- CLIQUE は 4 つの系統樹 CLIQUE (1~4) を出力した (CLIQUE (1) を図 5 に示す)。
- それぞれの系統群を互いに矛盾しない形で定義する改新は, 全 96 中 53 であると判断された。

◇ CLIQUE (1)

1,2,6,7,12,13,15,16,17,19,20,22,**24**,25,26,27,29,41,42,43,**45**,50,51,52,61,65,67,7
1,72,73,74,75,76,77,78,79,80,81,82,83,84,85,86,87,88,89,90,91,92,93,94,95,96

◇ CLIQUE (2)

1,2,6,7,12,13,15,16,17,19,20,22,**24**,25,26,27,29,41,42,43,50,51,52,**54**,61,65,67,7
1,72,73,74,75,76,77,78,79,80,81,82,83,84,85,86,87,88,89,90,91,92,93,94,95,96

◇ CLIQUE (3)

1,2,6,7,12,13,15,16,17,19,20,22,**23**,25,26,27,29,41,42,43,**45**,50,51,52,61,65,67,7
1,72,73,74,75,76,77,78,79,80,81,82,83,84,85,86,87,88,89,90,91,92,93,94,95,96

◇ CLIQUE (4)

1,2,6,7,12,13,15,16,17,19,20,22,**23**,25,26,27,29,41,42,43,50,51,52,**54**,61,65,67,7
1,72,73,74,75,76,77,78,79,80,81,82,83,84,85,86,87,88,89,90,91,92,93,94,95,96

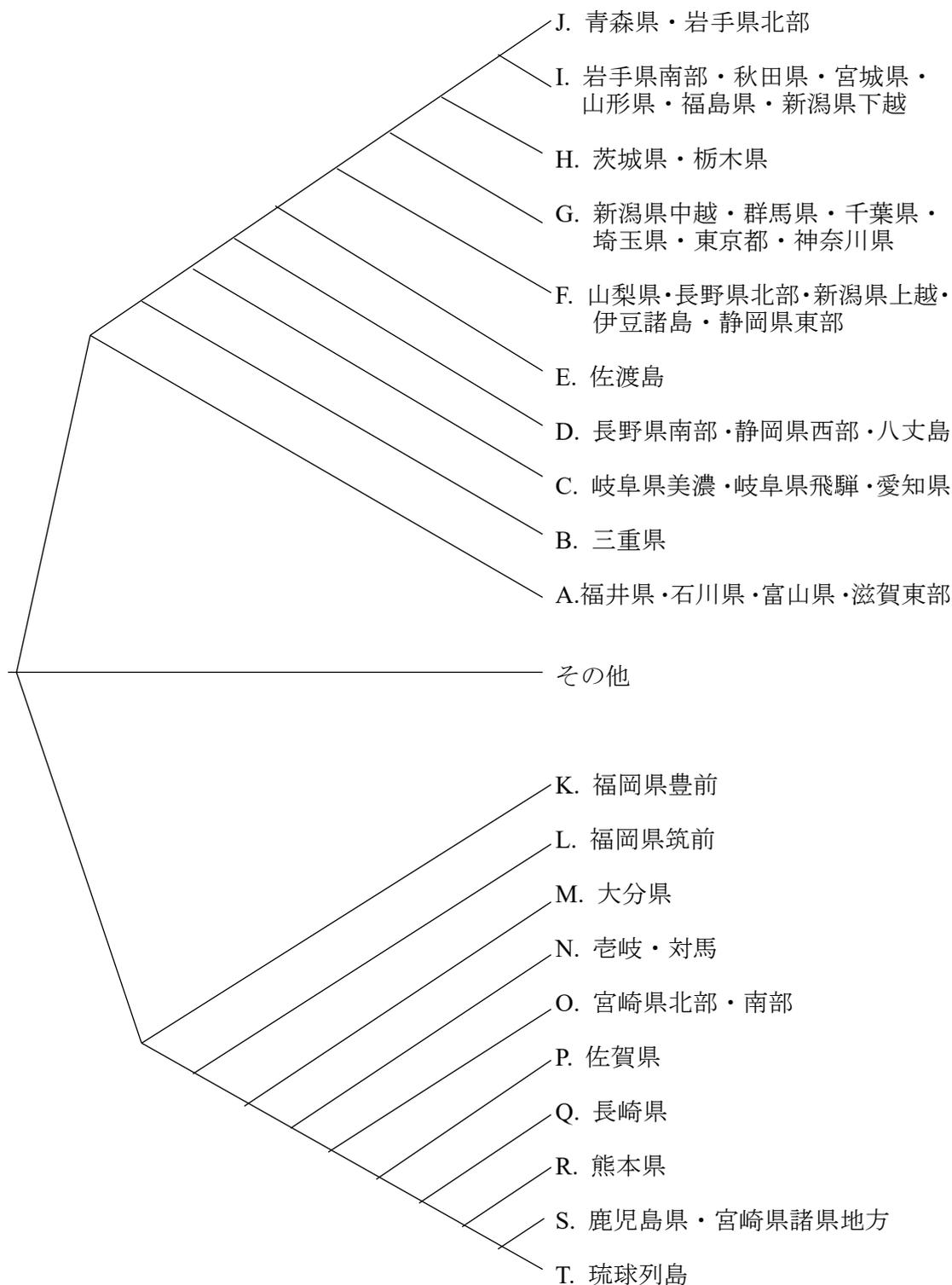
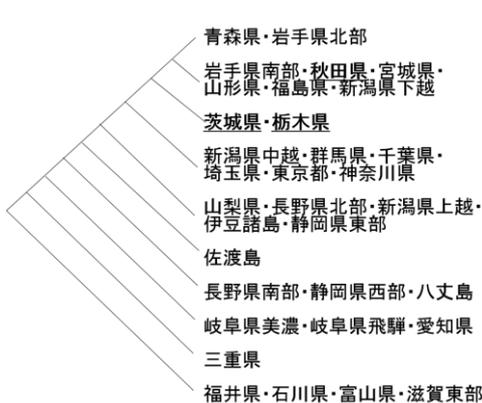
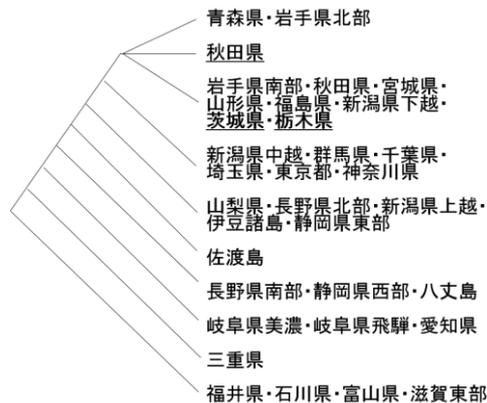


図 5: CLIQUE プログラムの結果 (CLIQUE (1))

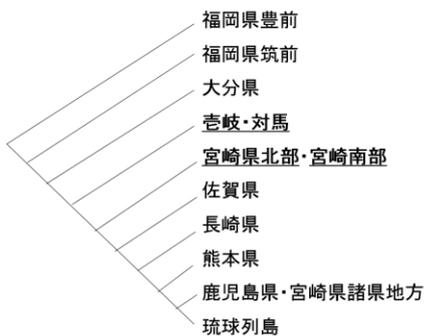
- CLIQUEによる4つの系統樹の主要な差異は図6の通り。
- 拡大東日本語派に関しては、秋田県、茨城県、栃木県の言語の系統的位置に差異が見られる (図6ab)。
- 南日本語派に関しては、宮崎県、壱岐・対馬の言語の系統的位置に差異が見られる (図6cd)。



a. CLIQUE(1-2)における拡大東日本語派の成員



b. CLIQUE(3-4)における拡大東日本語派の成員



c. CLIQUE(1-3)における拡大東日本語派の成員



d. CLIQUE(2-4)における拡大東日本語派の成員

図6: 4種類の系統樹 CLIQUE (1-4)の違い。

4. 議論と結論

4.1 琉球諸語の系統的位置

- 南日本語派のひとつであり, 日本祖語 (=日琉祖語) からの最初の分岐「琉球語派」ではない。
- 南部九州語 (~薩隅方言) と姉妹関係にある¹⁶。

4.2 八丈語の系統的位置

- 中核東日本語のひとつにすぎず, 日本祖語 (=日琉祖語) からの最初の分岐「八丈語派」ではない。
- 八丈語は, 奈良時代の東日本の言語, 上代東国語の特徴を最もよく保持しているので, 上代東国語の系統に属する唯一の現代語とする見解(服部 1968; Kupchik 2011¹⁷) が広く受け入れられているが, 今回の結果はこれを支持しない。
- 八丈語が上代東国語の特徴を最もよく保持している事実は, 八丈語が中核東日本語の一員とみなした上でも説明可能である。
 - 上代東国語, 八丈語, そして糸魚川浜名湖線以東の現代の諸言語は, 単系統群(中核東日本語)を構成する。
 - 八丈島以外で用いられる中核東日本語(長野県や東京都などの言語)は, その地理的位置から中央語の影響をより強く受けたので, 中核東日本語に固有の特徴を, 八丈語より多く失った。
- 八丈語をめぐる見解の相違は究極的には, 本州側の東日本の諸言語が中央語と類似している事実を, 言語の置き換えの結果と見るか(通説), 言語の置き換えは起きず, 強い影響を受けた結果とみるか(本稿の説)にある。

4.3 いわゆる本土日本語の系統的位置

- 「本土日本語」(琉球語と八丈語を除いた語群)は側系統群に過ぎず, 系統的分類群としては成立しない。
- 日本列島の諸言語を対象とした従来の比較言語学的研究は, 本土日本語(日本語派)という単系統群を大前提としていたが, 再考が必要である。

¹⁶ Serafim (2003)は琉球祖語の源郷を, 動詞活用パラダイムの合流, 名詞化接辞の音対応といった証拠に基づいて関門海峡付近とするが, 本研究の結果に基づく限り, 琉球祖語の源郷は薩摩半島から喜界島にかけての領域のどこかに置かれるべきであろう。

¹⁷ “Despite EOJ [Eastern Old Japanese –Y.I.] historically covering an area that includes modern day Tokyo, the only attested descendant of this language variety in modern Japan is the poorly documented language spoken on the Hachijō islands. The EOJ dialects on Honshū, the main island of Japan, were swallowed up by the Kyoto dialect that became the standard language during the Heian period (794-1185 CE) and spread across all of Japan. Some aspects of EOJ still linger in modern Japanese as substratum elements, however [...]” (Kupchik 2011: 9).

4.4 「その他」に属する諸言語の系統的位置

- いわゆる「近畿方言」, 「中国方言」 「四国方言」 「雲伯方言¹⁸」の系統関係は不明。
- 入れ子状の改新(言語特徴のマトリョーシカ分布)が特定できない¹⁹。
- 祖語の源郷がこの地域にある可能性が高いことが関係しているだろう(4.5参照)。

4.5 日本語族の源郷と移住経路

- 日本語族の源郷(Urheimat, homeland)は図7における青の領域のどこかであろう。
 - 少なくとも, 東日本, 西南部九州, 琉球列島ではありえない。
- ひとつの系統は東へそして北へ移動し本州北端まで達し(拡大東日本語派), もうひとつの系統は南へ移動し与那国島まで達した(南日本語派)と考えられる。

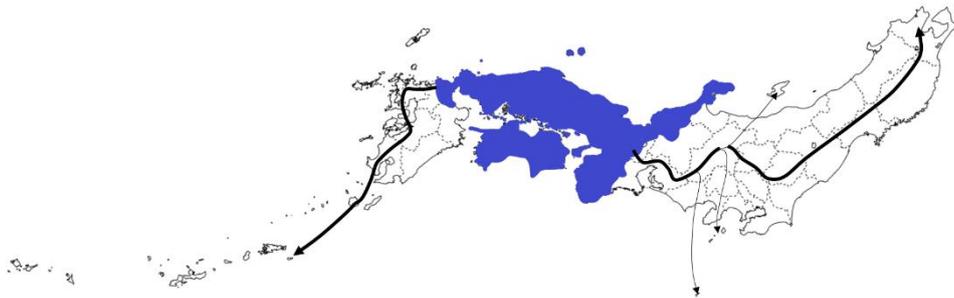


図7: 日本語(日琉語)集団の源郷と移住経路

¹⁸ いわゆる雲伯方言地域(島根県東部と鳥取県西部)を中心とした山陰の諸言語は, 拡大東日本語語とともに単系統群(「裏日本・東日本祖語」)を成す可能性を指摘したい。出雲地方の言語と東日本の諸言語(特に東北地方, あるいは日本海側の諸言語)と共通点があることはこれまでも指摘されてきたが, それらの多くは並行変化の結果の可能性が高い(例えば連辞 *da* の使用や中舌母音など)。しかしながら, 動詞 *kar-* 「借りる」の母音語幹化(*kari-*, *kare-*) (GAJ_75 参照)などの改新を, 山陰地方の言語と拡大東日本語語とがほぼ排他的に共有していることなど, 直ちには無視しがたい事実もある。また, 「表・裏日本型方便分布」「南北型方言分布」(安部 2013)と呼ばれてきたものの一部, 特に山陰地方の諸言語と北陸・東北とが共有する特徴の一部は, 裏日本・東日本祖語で生じた改新が, 山陰・北陸・東北では保持されたが, それ以外の東日本では中央語の強い影響のもと消失した結果と解釈できる可能性もある。出雲地方の言語と東日本の諸言語の類似性は分岐学的観点から再検討する必要がある。

¹⁹ ただし **naba* 「葺」が九州・琉球とともに, 広島県, 愛媛県, 高知県, 島根県岩見地方, 山口県に分布しており (LAJ 245), さらに **tutu/*tudu* 「唾」も九州・琉球とともに, 島根県岩見地方, 山口県に分布している (LAJ 118)。定義上, これはマトリョーシカ分布であり, もしこれらの語の分布が, 借用の結果でもなく, 並行変化の結果でもなく, そしてこれらの語が古形でないのであれば, 問題の地域の諸言語が単系統群を形成することになる。**tutu/*tudu* は **tu* 「唾」の reduplication であろうから並行変化の可能性もある。**naba* 「葺」は並行変化ではないだろうが, 古形の可能性もある(この語の語源論は坂口 1996 に要約されている)。**naba* と **tudu* 以外にも当該地域にはこの地域に特有の語が相当数分布している (**ta-io* 「目高・鮒」, **pjosu* 「鴨」, **atada* 「急」, **pogas-* 「穴を開ける」)。今後の課題はこれらが, 借用語か否か, 借用語でないのなら古形か改新かを決定することである。

五十嵐陽介 (2018)「分岐学的手法に基づいた日本語・琉球語諸方言の系統分類の試み」シンポジウム「フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史」(2018年12月23日, 国立国語研究所)

引用文献

- 安部清哉 (2013)「日本語の「南北型方言分布」研究のための言語地図一覧」『学習院大学文学部研究年報』(60), 21-79.
- 五十嵐陽介 (2016a)「琉球語を排除した「日本語派」なる系統群は果たして成立するのか?—九州・琉球語派」と「中央日本語派」の提唱—国際日本文化研究センター共同研究会「日本語の起源はどのように論じられてきたか—日本語学史の光と影」第3回共同研究会. 2016年8月30日. 京都: 国際日本文化研究センター.
- 五十嵐陽介 (2016b)「名詞の意味が関わるアクセントの合流—南琉球宮古語池間方言の事例—」『音声研究』20(3), 46-65.
- 五十嵐陽介 (2017a)「九州・琉球同源語調査票」一橋大学大学院 五十嵐陽介ゼミ「終日ゼミ」発表原稿 (2017年9月12日: 一橋大学).
- 五十嵐陽介 (2017b)「共通の改新に基づく分岐学的手法を用いた日本語諸方言の系統分類: 南日本語派 (琉球を含む) と東日本語派 (八丈を含む) の提唱」『比較言語学的方法による日本語・琉球諸語諸方言の祖語の再建および系統樹の構築』第1回打ち合わせ・検討会「日本語諸方言の系統関係について」2017年12月24日 (於: 国立国語研究所)
- 五十嵐陽介 (2018a)「3拍名詞第4類における本土方言と琉球語間1対2のアクセント型の対応について」『対象言語学の観点から見た日本語の音声と文法』研究発表会 (2018年9月17日, 沖縄: 琉球大学).
- 五十嵐陽介 (2018b)「九州語と琉球語からなる「南日本語派」は成立するか?: 共通改新としての九州・琉球同源語に焦点を置いた系統樹構築」平成30年度琉球大学学長 PI プロジェクト「琉球諸語における『動的』言語系統樹システムの構築をめざして」—鹿児島大学公開共同シンポジウム「九州-沖縄におけるコトバとヒト・モノの移動」(2018年11月3日: 鹿児島大学).
- 伊波普猷 (1911)「琉球人の祖先に就いて」伊波普猷『古琉球』沖縄: 沖縄公論社. pp. 1-60.
- 植村雄太郎 (2001)『種子島方言辞典』東京: 武蔵野書院.
- 上村幸雄 (1997)「琉球列島の言語 (総説)」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著)『言語学大辞典セレクション: 日本列島の言語』東京: 三省堂. pp. 311-354.
- 生塩睦子 (2009)『新版沖縄伊江島方言辞典』沖縄: 伊江村教育委員会.
- 風間伸次郎 (2012)「琉球諸語研究の視点—類型的・歴史的観点から—」若手研究者育成セミナー「消滅危機言語としての琉球語研究の意義と目的」東京: 東京外国語大学.
- 狩俣繁久 (2002)「琉球列島の下位区分」北原保雄 (編)『朝倉日本語講座10: 方言』東京: 朝倉書店.
- 狩俣繁久 (2016)「日琉祖語はどのように語られてきたか」国際日本文化研究センター共同研究会「日本語の起源はどのように論じられてきたか—日本語学史の光と影」第3回共同研究会. 2016年8月30日. 京都: 国際日本文化研究センター.
- 狩俣繁久 (2018)「語彙と文法から探る琉球語の南北差と九州からのヒトの移動」平成30年度琉球大学学長 PI プロジェクト「琉球諸語における『動的』言語系統樹システムの構築をめざして」—鹿児島大学公開共同シンポジウム「九州-沖縄におけるコトバとヒト・モノの移動」(2018年11月3日: 鹿児島大学).
- 菊千代・高橋俊三 (2005)『与論方言辞典』東京: 武蔵野書院.
- 熊谷康雄 (2007)『『日本語地図』のデータベース化』『日本方言研究会第85回研究発表会発表原稿集』, 27-34.
- 国立国語研究所 (編) (2001)『沖縄語辞典』東京: 財務省印刷局.
- 坂口至 (1996)「俚言アクセント研究序説—九州・沖縄方言における2拍名詞俚言語彙を例に—」『筑紫語学研究』7, 30-46.
- 上代辞 (1967)『上代語辞典編集委員会 (編)『時代別国語大辞典上代編』東京: 三省堂.
- 下地賀代子 (編) (2017)『たらまふつ辞典—多良間方言基礎語彙』沖縄: 多良間村教育委員会.
- 富浜定吉 (2013)『宮古伊良部方言辞典』沖縄タイムズ社.
- 仲宗根政善 (1983)『沖縄今帰仁方言辞典』東京: 角川学芸出版.
- 日国 (2000-02) = 日本国語大辞典第二版編集委員会 (編) (2000-02)『日本国語大辞典: 第二版』東京: 小学館. 日葡辞 (1980) = 土井忠夫, 森田武, 長南実 (編訳)『邦訳日葡辞書』東京: 岩波書店.
- 野原三義 (1979)「琉球方言と九州諸方言との比較」(I)『沖縄国際大学文学部紀要: 国文学篇』8(1), 1-16.
- 野原三義 (1981a)「琉球方言と九州諸方言との比較」(II)『沖縄国際大学文学部紀要: 国文学篇』9(1-2), 1-20.
- 野原三義 (1981b)「琉球方言と九州諸方言との比較」(III)『沖縄国際大学文学部紀要: 国文学篇』10(1), 1-16.
- 野原三義 (1982)「琉球方言と九州諸方言との比較」(IV)『沖縄国際大学文学部紀要: 国文学篇』11(1-2), 1-

五十嵐陽介 (2018) 「分岐学的手法に基づいた日本語・琉球語諸方言の系統分類の試み」 シンポジウム 「フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史」 (2018年12月23日, 国立国語研究所)

16.
野原三義 (1983) 「琉球方言と九州諸方言との比較」 (V) 『沖縄国際大学文学部紀要：国文学篇』 12(2), A1-A14.
橋口満 (2004) 『鹿児島方言大辞典』 鹿児島：高城書房。
服部四郎 (1968) 「八丈島方言について」 『ことばの宇宙』 3.11: 92-5. (服部四郎 (著) 上野善道 (補注)
(2018) 『日本祖語の再建』 東京：岩波書店, pp. 39-43 に再録)
服部四郎 (1978-79/2018) 「日本祖語について(1)-(22)」 『言語』 7(1)-8(12) (服部四郎 (著) 上野善道 (補注)
(2018) 『日本祖語の再建』 東京：岩波書店, pp. 87-401 に再録)。
原田章之進 (編) (1993) 『長崎県方言辞典』 東京：風間書房。
方大辞 (1989) = 小学館国語辞典編集部 (編) 『日本方言大辞典』 全3巻。東京：小学館。
前新透 (著), 波照間永吉・高嶺方祐・入利照男 (編著) (2011) 『竹富方言辞典』 南山舎。
宮城信勇 (2003) 『石垣方言辞典』 沖縄：沖縄タイムズ社。
ローレンス, ウェイン (2003) 「多良間方言の系統的位置」 沖縄県国際シンポジウム実行委員会 (編) 『世界に拓く沖縄研究—沖縄研究国際シンポジウムヨーロッパ大会—』 238-247, 沖縄県国際シンポジウム実行委員会。
ローレンス, ウェイン (2004) 「琉球祖語*kaja 考」 『琉球の方言』 28, 43-51。
ローレンス, ウェイン (2008) 「与那国方言の系統的位置」 『琉球の方言』 32, 59-67。
ローレンス, ウェイン (2011) 「喜界島方言の系統的位置について」 木部暢子・窪園晴夫・下地賀代子・ローレンスウェイン・松森晶子・竹田晃子 (編) 『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究：喜界島方言調査報告書』 国立国語研究所共同研究報告 10-01, pp. 115-122. 東京：国立国語研究所。
GAJ (1966-74) = 国立国語研究所 (編) (1966-74) 『日本言語地図』 全6巻。東京：大蔵省印刷局。
LAJ (1989-2006) = 国立国語研究所 (編) (1989-2006) 『方言文法全国地図』 全6巻。東京：財務省印刷局。
Atkinson, Q.D. & R.D. Gray (2005) "Curious parallels and curious connections? Phylogenetic thinking in biology and historical linguistics," *Systematic Biology* 54 (4): 513-526.
Brugmann, Karl (1884) Zur Frage nach den Verwandtschaftsverhältnissen der indogermanischen Sprachen. *Internationale Zeitschrift für allgemeine Sprachwissenschaft* 1. 228-256. (未見)
Campbell, Lyle (2006) *Historical Linguistics: An Introduction*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
Campbell, Lyle and William J. Poser (2008). *Language Classification: History and Method*. Cambridge: Cambridge University Press.
Felsenstein J. (1989) PHYLIP - Phylogeny Inference Package (Version 3.2), *Cladistics* 5: 164-166.
Fox, Anthony (1995). *Linguistic Reconstruction: An Introduction to Theory and Method*. Oxford: Oxford University Press.
Kupchik, John E. (2011) A Grammar of Eastern Old Japanese Dialects. PhD dissertation, University of Hawai'i.
Lee, S. & T. Hasegawa (2011) "Bayesian phylogenetic analysis supports an agricultural origin of Japonic languages," *Proc. the Royal Society, Biological Sciences*, 278(1725): 3662-3669.
Leskien, August. (1876) *Die Declination im Slawisch-Litauischen und Germanischen*. Leipzig: Hirzel.
Pellard, T. (2009) Ogami: Éléments de description d'un parler du Sud des Ryukyu. Ph.D. dissertation, École des hautes études en sciences sociales.
Pellard, Thomas (2015) "The linguistic archeology of the Ryukyu Island," In: Patrick Heinrich, Shinsho Miyara, Michinori Shimoji (eds.) *Handbook of the Ryukyuan languages: History, structure, and use*, 14-37. Berlin: DeGruyter Mouton.
Sagart, Laurent (2004) "The higher phylogeny of Austronesian and the position of Tai-Kadai," *Oceanic Linguistics*, 43 (2), pp.411-444.
Sagart, Laurent (2013) "The Higher Phylogeny of Austronesian: a Response to Winter," *Oceanic Linguistics*, 52(1), 1-9.
Saitou, Naruya and Timothy A. Jinam (2017) "Language diversity of the Japanese Archipelago and its relationship with human DNA diversity," *Man in India*, vol. 97, no. 1, pp. 205-228.
Serafim, Leon A. (2003) When and from Where did the Japonic Language Enter the Ryukyus? -A critical comparison of Language, Archeology, and History. *Perspectives on the Origins of the Japanese Language* 31, 463-476.